

第56回「博報賞」受賞

(特別支援教育領域)

神奈川県 特定非営利活動法人^{こころ だま}心魂プロジェクト

難病児に届ける“心が動く体験” ～子どもたちの成長と命の輝きを引き出す～

滝川国芳 京都女子大学 教授

「博報賞」は、「こころ」の力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい。そのような思いを核として、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の「波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献」を顕彰しています。このたび、「特定非営利活動法人心魂プロジェクト」(以下、心魂プロジェクト)の取り組みが、第56回「博報賞」に選ばれました。

心魂プロジェクトは、劇団四季や宝塚歌劇団出身の俳優を中心に、難病や障がいのある子どもたちやきょうだい児、その家族に向けて、本格的な舞台芸術を通じた「心が動く初めての体験」と「表現活動の機会」を提供しています。小児病棟や自宅で療養するなど外出が難しい子どもたちが「感じる・表現する・つながる」ことをあきらめなくすすむよう、訪問型公演とオンライン配信を組み合わせ、状況に応じて安心して参加できる体験の場を創っています。「劇場に來られないなら私たちが行けばいい」という想いで、公演を届け続けている点も特徴です。また、子どもがパフォーマーとして舞台に立つ「心魂キッズ団」では、視線入力やスイッチなどの支援機器、映像出演、メタバース参加など、その子ができる方法を活用し表現の場を広げています。歌や踊りを通じて生まれる身振り、表情、声といった心の動きは、豊かなコミュニケーションの手段となり、子どもの「伝えたい」「届けたい」という思いが形になる過程を大切にしています。「やってみたい」「できた」「伝わった」

という経験ができるよう工夫しながら、自己肯定感や主体性の成長につなげている点も高く評価されました。

筆者らは、令和8年1月29日に公演先である沖縄県立島尻特別支援学校を訪問し、午前は小学部児童、午後は中学部・高等部生徒を対象とした心魂プロジェクトのパフォーマンスを鑑賞し、公演後、法人の共同代表で総合プロデューサーの寺田真実さんと代表理事の有永美奈子さんにこれまでの取り組みやお考えについてお話を伺いました。

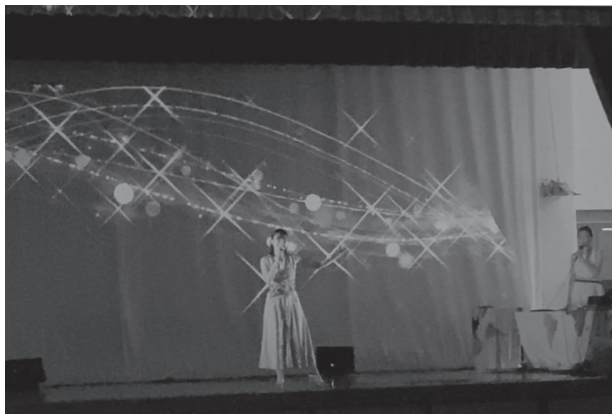
【設立の経緯について】

寺田さんは5歳から15歳まで台湾で暮らし、規模の小さな日本人学校で学びました。小学1年生が中学3年生の教室に遊びに行けるような上下関係のない環境でしたが、日本に帰国すると学校環境の違いからいじめを受けました。当時は先輩を絶対的に扱う風潮があり、意見をはっきり言う寺田さんは無視されたり、「こころまでがお前の世界だから、こころに來ないで」と線を引かれたりしたそうです。両親の仕事の都合で約10回転校しましたが、日本人でありながら受け入れてもらえない状況が続いたといいます。

その後、会社員を経て、入団した劇団四季で活躍していた時期に、転職となる出来事がありました。『ライオンキング』を観劇した自閉症の10歳の男の子が深く感動し、次は一人で観に行きたいと言い、男の子はバス停まで歩く練習や、一人でバスに乗る(有永さん)私は、心が動かされた経験が本当に無限にあります。今日も、素敵なお子たちから、たくさんのお話を聞かせてもらっています。特に、博報堂教育財団が大切にされている「こころ」については、私自身、とても考えさせられています。私たちが出会う子どもたちの多くは、「こころ」を話すことが難しく、中には、体を動かすことも難しく、まばたきで表現してくれる子どももいますし、そのまばたきすら難しい子どももたくさんいます。でも、私は一度も「この子たちにはこころがない」と思ったことはありません。子どもたちの目の奥を覗くと、本当にたくさんのお話を語りかけてくれているのが分かるのです。それは、私がお子たちから教えてもらった大きな気づきでした。つまり、みんなそれぞれに自分の「こころ」をもっているのです。自分なりの表現方法で、思いをきちんと伝えていく。大切なのは、私たちがその表現をどれだけ受け取れるかでしょうかと、強く感じています。

(寺田さん)劇団四季はプロの世界ですから、どうしてもキャスト同士が比較されることがあります。お客様がチケットを購入するときには、「このキャストで観たい」という期待がありますよね。ところが、実際に劇場へ来てみたら、自分が望んだキャストではなかった。すると、緞帳の向こう側から、「本当はあの人で観たかったのよ」という声が聞こえてくるのです。それを感じ取ってしまうと、思わず「ごめんなさいね」という気持ちになって、舞台上立つ前から心が折れそうになることがあります。最善を尽くしたいという思いは常にあります。

【「心を動かす」体験を届けるための原動力となる、「心が動いた」「心を動かされた」経験があれば、ぜひ教えてほしいです。】



体育館でのパフォーマンスⅡ：レット・イット・ゴー



体育館でのパフォーマンスⅠ：コンパス・オブ・ユア・ハート

すが、「このようなことがあると、どうしても心が少しづつ疲弊していくのです。初めて重症心身障がい病棟を訪問したとき、そこには人と人を比べるような人が一人もいませんでした。与えられたもの、今ある状況を、みんなが最大限に生き合っている。その姿が本当にうれしく、今を生きている」ということを改めて教えてもらいました。

「変化が見えにくい重度障がいのある子どもに対して、表情や視線といったサインをどのように共有し、行動の変化を「見える化」しているのでしょうか。また、パフォーマンズを行いながら、どのようにその行動変容を確認しているのか教えてください。」

(有永さん) 私たちは、子どもたちを「できない子」と思ったことはありません。教育の専門家ではなくパフォーマーだからこそ、そもそも誰も「できていない」ところから一緒に始めるという感覚があります。知的な遅れがあることも捉えています。きちんと受け取れることを投げれば、必ず届くと信じています。やろうとした瞬間を逃さず受け止めることで、子どもは自信をもち、その積み重ねが成長につながる。キッズ団の子どもたちも大人と同じ誇りをもってステージに立っています。

(寺田さん) 保護者の意識改革も一緒に行きます。例えば「うちの子は体が思うように動かないから踊れない」とおっしゃいますが、実際には踊れていることが多いのです。歌だつて、音痴と言われ続ければ誰でもそう思い込んでしまいます。だからこそ、保護者の思い込みがありません。そのため当初は、私が公演全体の9割以上を考えて進めていました。私は元会社員で営業出身なので、お客様の潜在的な需要から逆算して企画をつくることに慣れていますが、美しさをダンス力はない。その不足を補う存在として、宝塚・劇団四季などを経験した有永さんと出会えたことで成功率が大きく上がりました。設立当初は全員が辞める可能性も覚悟し、最悪の場合は二人でも続けるつもりでした。彼女は芸歴が長くプライドもあるはずなのに、良いと思えば私のアイデアを受け止め、一緒に挑戦してくれるのが本当にすごい点です。照明が照らす向きを車いすの子の目線に合わせて天井に向けてたり、音の苦手な子には静かな音づくりからスタートしたり、プロなら嫌がるような工夫も「楽しんでもらうため」に行っていました。こうした工夫から生まれるお客様との信頼関係が、今の活動を支えています。

「日本の学校教育について考えている点があればお聞かせください。」

(有永さん) 学校の先生がとても疲弊しているように感じることがあります。私たちのような第三者ができることはたくさんあるのではと考えています。少し予想外の生き方をしてきた私たちだから「こんな生き方もあるよ」と子どもたちに伝えることができます。心魂が行っているワークショップのように、普段一緒にいない第三者だからこそ、子どもたちの変化や反応に敏感に

みを一緒に外していくことが大切で、お父さん、お母さんが変わると子どもも自然と変わります。子どもが「やりたい」と示しているなら、止めないでほしいと伝えていきます。

(有永さん) 「今、こうしたね」とことばにすることで、保護者の方や周囲が子どもの変化に気づくことがあります。私は、体が自由だからダンスはできない、と決めつけたくありません。ダンスは本来「祈りの表現」であり、彼らの動きこそがダンスでありパフォーマンスです。だからこそ私たちは心魂のメソッドをつくり、その価値を伝えることを大切にしています。

(寺田さん) 私たちが大切にしているのは、心が伴っていないのに歌を歌ったり、表現をしたりすることは本来おかしい、という考え方です。だからこそ、どうすればその心の状態になれるのか、心が動いた瞬間の表現をそのまま届けられるのか。そこ「こだわり、パフォーマンスを追求しています」。

「必要だと感じたらまず動く」という行動力の源として、どのような判断基準や思考プロセスがあるのでしょうか。新しい挑戦に踏み出す際、特に大事にしていることを教えてください。」

(寺田さん) 日本では新しいことをすると「変な人」と見られがちで、0から1を生み出す人が育ちにくいと感じています。私たちの公演も、劇団出身者は静かな客席に慣れており、立ち歩いたり声を出したりする子どもへの臨機応変な対応は経験したこと

気づける部分もあります。沖縄の学校では、先生方がとても楽しそうだったのが印象的でした。先日公演を行った特別支援学校では、教室からいきいきとした歌声が響き、子どもと先生が同じ目線で生きていると感じました。学校関係者だけでは抱えきれない部分を、私たちのような外部の人間が自然に支えられることができるような関係性が築ければ、学校教育はもっと豊かになるのではと考えています。

最後になりましたが、公演中、体育館で子どもも先生も笑顔で、自由な身体表現しながら過ごしている姿を見て、心魂プロジェクトの皆さんがパフォーマンスを通して子どもたちの「自分らしさ」を引き出していることに深く感動しました。今後とも、「ワクワク・ドキドキ・感動を難病児・障がい児・きょうだい児とその家族へ届けたい」という心魂プロジェクトの理念が全国へ広がっていくことを期待しています。



筆者と寺田さん(左)・有永さん(右)



体育館で子どもも先生も笑顔で、自由な身体表現 II



体育館で子どもも先生も笑顔で、自由な身体表現 I

「博報賞」について

「博報賞」は、児童教育現場の活性化と支援を目的として、財団設立とともにつくられました。「ことばの力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい」とそんな思いを核に、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の「波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献」を顕彰しています。また、その成果の共有、地道な活動の継続と拡大の支援も行っています。

活動領域

- 国語教育 ●日本語教育 ●特別支援教育
- 日本文化・ふるさと共創教育
- 国際文化・多文化共生教育 など

博報賞問合せ先: hakuhouhou@hakuhodo.co.jp

公益財団法人 **博報堂教育財団**

〒100-0011 東京都千代田区千代田2丁目2-3 日比谷国際ビル14階 TEL(代表):03-6206-6266(平日9:30~17:30)

第57回「博報賞」応募受付期間

2026年4月1日(水)~6月25日(木) ※財団必着
 正賞: 賞状
 副賞: 博報賞100万円 功労賞50万円 奨励賞30万円
 後援: 文部科学省

第57回の詳細については、
 博報堂教育財団ホームページをご覧ください。

